

きな珍しい花というので、多数の観覧者が押しかけました。

私にも神代植物公園時代に、同じような思い出があります。1985年の8月下旬、前年にオープンした大温室で、本物の夜来香（イエライシャン）の花が日本初公開となり、幻の花としてニュースに流れ、いつもなら人影もまばらな残暑の植物公園が大賑わいとなりました。夜来香は戦前の歌謡曲でよく名前を知られていたものの、当時それとして広まったのは別の植物（月下香）で、今度のものが正真正銘の本物、しかも導入から公開までに15年を経過していたことが、ニュース性を大きくしました。

実はこの夜来香は、私が1970年にタイのバンコクで見つけて、持ち帰ったものでした。1975年に初開花して確認したものの、当時公開観覧用の温室がなかったことと、私が都庁に転勤して在職しなかったこともあり、未公開のままに置かれていたのです。

この公開によって、テレビや新聞などの取材があり、一介の職員に過ぎない私の名前や顔がニュースに流れ、マスコミの力の大きさにも驚きましたが、お客様にも広く知っていただき、様々な分野の方々と親しくなれ、のちの植物園活動に力が付きました。

夜来香は、ただ偶然に持ち帰ったわけではありません。私が1957年に千葉大学に入学した時、教養課程の植物学で渡辺清彦教授の講義を受けました。ある日先生は一枚のスケッチを示され、この中には園芸の学生がたくさんいるが、日本の園芸界で夜来香としているものは月下香のほうで、本当の夜来香はこんなものなのです。このことが私の意識の中に、卒業した後も残っていました。それで1970年の11月、日本植物園協会の植物調査でタイ国を訪れた時、ぜひこの植物を見つけて持ち帰りたいと思ったわけです。

この植物図は渡辺先生が「植物を理解するには、写生図に及ぶものはない」という信念でライフワークとされたもので、戦時中にペナン植物園長として赴任中も公務の間に描き続けられたものです。敗戦によりシンガポール植物園に残されたこの図は、私達が学生になった頃に、親交のあった熱帯植物の権威、ケンブリッジ大学のコーナー博士の尽力によって返還を受け、講義の都度様々な有用植物の図を見せて下さったのです。

夜来香は中国南部からインドシナに自生する熱帯性の蔓草で、十分に蔓をのばした高温期に花をつけます。緑黄色径20mmほどの美麗なものではありませんが、その香りはただものではないのです。いやな臭いという

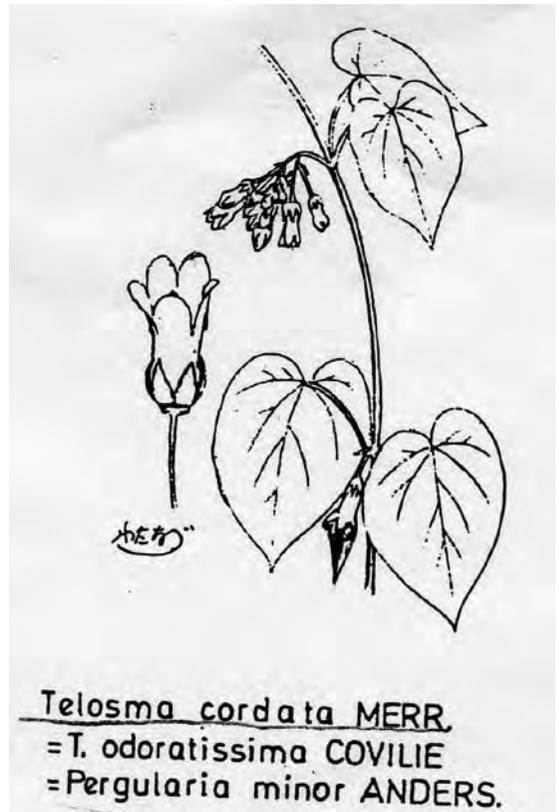


図1 渡辺清彦先生の夜来香の図
〔熱帯植物集成〕より転写

人も少数ありましたが、多くの人の感覚では黄色のパラの香りに少し青臭さを加えたようで魅力的です。麝香様な香りも含まれているようですから、ミセスの香りなのでしょう。香りは性的な興奮を醸すものでもあり、昔から夜来香が珍重された理由だと考えます。

昼間も香りますが、夜には濃淡の波となって暗闇の彼方からおしよせ、途切れることはありません。広州やシンガポールではこの花をスープや料理に入れて食べ、摘んだ花が市場で売られるのをテレビで見ることもあります。残念ながら、私はまだ現地で食べる機会がありません。

私はバンコクの市内で週末に開かれるサンデーマーケットで、夜来香の苗を見つけることができました。売っていたのはただ一軒で、一緒に行ってくれたランが専門のタイの大学院生の女性は、この植物を知りませんでした。私が頼りとするのは渡辺先生のスケッチのみ、しかし子供の頃から植物を観察してきた勘によって、これこそ夜来香に違いないと判断し、念のために葉を一枚ちぎってみると、予想したとおり白い乳汁が出ました。夜来香はガガイモ科の植物で、この仲間と共通する性質だからでした。

大きなニュースとなった夜来香でしたが、世間には広まっておりません。その後園芸店で鉢作りが売られているのを見ましたが、売れ残っておりまして。夜来香という名前とその香りには魅力があっても、姿は野草そのものでガガイモに似ています。近縁のマダガスカルシタキソウはつやのある濃緑色の葉に香りの良い白い花が目立ち、鉢物として人気がありますが、これと比較すると何とも商品価値の低い植物とされてしまうでしょう。サンデーマーケットには、多くの人が通われていたはずなのに、誰一人夜来香に目をつけなかったのは、この植物が売り物になる園芸植物として評価されないからでしょう。だからこそ私が見つけて持ち帰り、植物園で育てて見せることに意義があったと思います。

園芸遍歴から桜草へ

私は愛知県の田舎町に生まれ、花を楽しむなどとは罵られた戦争の時代に物心がつき、平和な時代とともに成長したおかげで、植物を楽しむ仕事をして生きてくることができました。農家ではありませんでしたが、田舎でも食糧難の時代でしたから、誰もが畑で作物を育て、子供たちも手伝って働き、これが後に役立ちました。

家には植物好きだった父親が買い揃えていた植物図鑑類があり、牧野植物図鑑と石井勇義氏編集の原色園芸植物図譜（改定版）は、小学生のころから絵本と同様に毎日のように開いて、庭の植物と見比べておりました。この園芸植物図譜は、戦前の本としては画期的なカラーの写真版で、上中巻には西欧や温室の植物が、下巻には日本の園芸植物がもれなく収録されています。当時は学校にも植物図鑑類は揃っておらず、たいへん恵まれた環境にあったと、これだけは父親に感謝しております。

こうして図鑑類を毎日見ているうちに、野生樹木から園芸草花までが私の基礎知識として頭のひだに挟み込まれていったようです。中学生になるころには、日曜には胴乱をかついで植物採集に出かけ、押し葉にして野生の植物を覚えました。家の庭では園芸に明け暮れ、サボテンからアサガオやキク、ダリアやグラジオラス、やがてバラやサクラソウ、ツバキという具合に、野生のものから園芸植物、和洋の別なく対象が広がってゆきました。受験勉強などなかった時代でしたから、親も周りの人も少し変わった子供だという認識は持つものの、学校の成績で何かを云われたことはありませんでした。

あらゆる植物に関心を広げても、すべての植物が育てられるわけもなく、他人が手をつけられない植物こそ私が手がける分野だという思いが芽生え、その一つが桜草だったようです。

先の原色園芸植物図譜の中に、桜草の園芸品種が十数点掲載されており、初めて見たときから、何と美しい愛らしい花なんだろうと、子供心にも深く感じたものでした。1958年の春に、前年に発足した「さくらそう会」から配布苗を受け、初めて育ててみると私が思っていた通りの美しい草花で、生涯を通して育ててゆくことになったわけです。

「さくらそう会」は、同窓の大先輩である大山玲瓏氏が世話人になって設立された趣味園芸の会で、江戸時代に園芸草花に育てられた桜草が、戦争で絶滅寸前の状態にあったものを保存普及することが目的でした。上京後は一番若い会員としてお手伝いをし、現在も世話人として、会の運営に関わっております。

それから半世紀あまりたち、先輩会員方の地道な活動によって桜草は全国に愛好者が広がり、絶滅を危惧する人はいなくなりました。本当に美しいものは誰かが残してくれる、決して失われることはないという確信を持つことができました。

桜草は高原生でありながら以外に性質が強く、ブルームラのなかでもっとも暑さに耐える植物で、江戸時代に生まれた園芸品種が生きて伝えられております。ただ長い歴史の間には災害や戦争の混乱期があり、異名同品や間違いも多く、桜草を保存し普及してゆくには何百も存在する品種を調査して、整理しなければなりません。大山氏をはじめ先輩方も努力されましたが、途中からこれは私の仕事と考えて、今日までに整理統一をほぼ完了しました。長年多くの植物を観察してきた経験と、少しばかりの遺伝・育種の知識、古いしがらみにとらわれない世代であったことで、進めることができたと思います。一つの品種には相応する一つの名称をあて、さくらそう会認定品種とするやり方を軌道に乗せました。この結果はその都度会の総会で決定して発表しましたが、私の名前で発刊されました2冊の図譜で、公表しております。「さくらそう」日本テレビ出版部発行・絶版（1985年）、色分け花図鑑「桜草」学習研究社（2006年）です。

桜草づくりは、楽しみのために趣味として育てられてきた伝統があり、古い歴史的な園芸品種が捨てられずに残されてきました。現在300あまり存在する品種の三分の一にあたる100品種が、江戸時代から生き続けてきた文化財ともいえる存在です。



写真2 「桜草花壇」江戸時代の観賞方式を再現したもの



写真3 桜草「山下白雨」(鳥居選抜命名)

我が家では品種の維持と会員への配布のために育てているので、うまく育てようという意志はもっていません。沢山の中には少しは咲きそろうものもあり、展示会に出展し、自宅にも桜草花壇を組み立てて飾り、公開日を決めて見ていただいております。

江戸の園芸文化

私は植物だけでなく、古くからの日本の文化にも興味を持ち、古い絵画や芸能、歌舞伎や人形浄瑠璃なども面白いと思いました。義太夫の語りなども中学生の頃には普通に聞き取れ、内容もよく理解できました。そんな子供ですから学校でも古文は得意で、現代語訳

するまでもなく、原文のままでよくわかりました。耳から聞いた邦楽の章詞や云いまわしは、古い文章を読むのに役に立ち、さらに変体がなや崩し字、当て字、決まり文句などがわかれば、江戸時代のものなら何とか読むことができます。高校時代から断片的ですが様々な資料を見て、江戸時代の園芸の有様を知ろうとする努力は続けております。

こんなわけで縦書きの日本語には自信もありますが、横文字のほうはさっぱりだめで、読むことも書くこともおぼつかなく、欧米語は今も不得意です

千葉大学に入った1年目に古文の講義を受けたとき、教材の中に「西鶴置土産」がありました。その中の一章に下谷の裏長屋に住む老婆が、垣根に枯れ残った朝顔の蔓からたねを集める描写があります。そのたねをどうするのかと尋ねると、来年春にこのたねを蒔いて、また夏に朝顔の花を楽しみますのじゃ。この文章を読んだ私は、これこそ江戸の園芸の本質を物語るものとして、強い感銘をうけたのでした。西鶴の作品には情景描写の部分に、実際に見聞きした暮らしの一端がありのままに表現されているのです。

西欧では園芸は王侯貴族の楽しみで、富と権力を誇示するものだったのです。江戸の園芸も大名や金持の楽しみでしたが、貧しい裏長屋の老婆であっても、その日暮らしのなかで、朝顔を楽しんだという事実が、文芸の中に伝わっていることは驚きです。庶民もそれ

なりに園芸を楽しんだというのが、江戸の園芸の大きな特色だと私は云いたいわけです。

園芸は都市で生まれるもので、農村は生産地ではあっても園芸を楽しむところではありません。江戸で園芸が発展したのは、人も物も金も集まってくる大消費都市になったからです。園芸もその市民活動の中から生まれた文化として、総合的に研究すべきものと考えております。政治や経済・社会に関する全体的な歴史を中心に、浮世絵や芝居、音曲、遊郭、俳諧、狂歌、黄表紙など最も江戸らしい世界にも踏み込まないと、深く理解することはできないでしょう。私はどうしたわけかこれらの世界にはたいへん興味がありましたので、同年代の人の中では詳しいほうに入っていると思っております。

嫌いな植物はありません

退職した後はどこへも所属せず、植物・園芸研究者という名乗りで普及活動をしてきました。研究者とはおこがましいのですが、ほかに云いようがないからです。立派な研究と評価される論文を発表し権威と認められるようなことは、無縁の世界で生きてきたのです。でも何事をやっても研究は伴います。いろいろなことを体験して、自分なりの見識を示すぐらいは許されるのかと思います。

私の立場でもっとも重要視しているのは植物の名前で、正確なあるいは適切な植物名を知らせるということです。園芸界では植物の種と品種の区別がなく、植物名よりも品種名のほうが重要視されることが多く、これには営業上の思惑が潜んでいます。現在の品種はたいへん利那的で、何年もたたぬうちに売られなくなり、忘れられてしまいます。だから何という植物であるか、その種の名前をはっきりと表示しなくてはならないのです。

次に大切にしたいのは季節感です。日本には古くから花鳥風月といわれて、季節の移ろいの中で植物を主体とした自然を楽しむ暮らしの文化が伝えられてきました。生産園芸の世界では経営上の問題もあって、季節感はずっかり失われてしまった感がありますが、せめて楽しみとしての園芸の世界では、季節の花を楽しみたいものだと思いますし、それがセールスポイントとなる営業もあるはずです。

私には現在嫌いな植物は一つもありません。子供の頃から植物に親しみ、長く植物園で様々なお客様のお相手をするうちに、どんな植物や花にもどこかに見どころがあり、その良い美しいところを見出して楽しむ



図2 ボタニカル・スケッチ No.1659
花業会海外調査ツアーに参加。豪州パース付近でスケッチの Tassel Flower。園芸植物としても使えそう



写真4 筆者：植物はハマトラノオ（ゴマノハグサ科）、九州甌島産の海岸野生植物。花友からもらい挿し芽と実生で繁殖。そのままでも園芸植物として扱える

るようになったのです。

渡辺清彦先生を思い出し、六十の手習いで始めたボタニカル・スケッチは、4,400点がたまり、私の植物図鑑となりつつあります。